

●大和朝廷の成立

三〇一年(辛酉年)元旦、雅楽が厳かに流れて猿女君(天鈿女子孫)らが神楽を舞い踊る中、磐余彦は建国の儀と即位式に臨んだ。儀式が盛り上がったところで、彼は火火出見愛用の礼衣を纏った姿で現れ出て、神日本磐余彦火火出見と名のるや、神璽の鏡剣を捧げ持つて大和朝廷の建国を高らかに宣言した。次に、三嶋溝クイ耳の孫娘・媛タタラ五十鈴媛を尊んで正妃に迎えると言明言した。

これを祝福して、可美真手が中つ鏡・辺つ鏡など瑞宝十種を奉献し、ついで神楯を持った近衛兵を御前にずらりと並べて忠誠を誓った。斎部の天富も天璽の鏡剣を捧げながら祭壇に奉った後、朗々と祝詞を詠み続けていた。

ここに、火火出見の夢が叶って大和朝廷が始動した。磐余彦はその初代天皇に立つことから、始馭天下之天皇はつづくにしろす(初めて国を治めた天皇)と呼ばれ、後世に神武天皇と諡された。スメラミコトなる呼称がシヌメルに由来することは、皆の認めるところだ。

「神武紀」、「辛酉年の春正月の庚辰の朔ついでちに、畝傍の樞原うねびに、宮柱底磐みやはしらしたついはの根ふとしきに 太立たて高天原ちぎたかしに、搏風峻峙はつづくにしろすりて、始馭天下之天皇はつづくにしろすを、号なづけたてまつりて神日本磐余彦火火出見天皇と曰す」

秋七月に、垂仁が崩御した。その年の暮れに、広い周濠に満々と水を湛えた垂仁陵が完成した。その雄姿は中国の人々が東海上に浮かぶとした三神山の一つ、蓬莱島に模して造られていた。

翌春二月、神武は東征と建国に手柄を立てた者らを集めて褒め称え、恩賞で以って報いた。一番の功労者・道臣に対しては、所領に家も添えて傍らに侍らせた。久米には畝傍山西に土地を与えて住まわせた。

終始、東征軍の先頭に立ってきた椎根津彦に対しては、大和国造なる地位が用意されていた。

竹内宿禰は、「命ある限り大臣を勤めよ」との誉ある言葉を賜った。その児・襲津彦は大和の葛城鴨族を配下に頂戴した。

八咫鳥とも呼ばれた武角身は、山城で新たな賀茂家を興すように促された。

騎馬隊と共にやって来た新羅王子は天日鉾軍末裔を寄せ集めて橘家を興し、応神直々に仕えた。さらに小千族ら播磨勢をごっそり賜った上に、伊和族を穴栗邑に封じ込める役目も仰せつかった。

☆応神期に、新羅王子が橘氏と語って天皇直々に仕えたことで、新羅からの知識人や技術者が多数渡来して、古墳の副葬品に大きな変化を及ぼした。

それまでの副葬品は宝器や祭器が主だったが、ある時期を境に金銀で飾り立てた大陸風の冠・耳飾り・剣、騎馬戦用の武器に置き換わった。これを根拠に騎馬民族征服説がかつて流行了った。だがその実は、新羅王子率いる騎馬軍団が大和朝廷樹立に一役買っただけの話だ。

逆に、不運な目に遭った者たちもいた。西南征夷將軍だった彦狭嶋は、東山道都督として東国赴任を命じられたが、実際は追放同然の沙汰だった。高齢の彼は病を押して都を発ったものの、その日の内に倒れて逝った。その屍は大和で葬られることもなく、東国へ運ばれていった。景行は公務に一区切りつけたところで、都督に格下げされて大津高穴穗宮に遷った。

「景行紀」、「五十五年の春二月に、彦狭嶋王を以て、東山道の十五国の都督に拝けたまう。是豊城命の孫なり。然して春日の穴咋邑に到りて。病に臥しみまかりぬ。」

翌月、垂仁（火明饒速日）の命で十年前に常世へ遣いした田道間守（天日槍の四代目、三宅氏の祖）が、非時の香菓かぐのみを持ち帰った。彼は垂仁の逝去を聞くや、墓前に参って泣き伏した。

「詔を拝して常世に遣いして参りました。使命を遂げたい一心から万里の波頭を乗り越え、遙か

よわのみず

弱水まで足を運びましたが、そこは神仙の住む秘境にあり、俗人の行く所ではありませんでした。往復に彼これ十年も費やしてしまい、再び大海原を渡つて戻れるとは考えもしませんでした。仙化した帝の神霊に導かれて、ようやく帰国が叶いました。

だのに、天皇はすでにこの世になく、復命もままなりません。私めは、これ以上生きていて何のお役に立ちましようぞ」

彼はこう言うや、墓前で自ら命を断つた。奈良市尼辻町に築かれた垂仁陵は、宝来山古墳と名づけられた。その周濠に浮かぶ中島なる小島は常世島と呼ばれて、田道間守の墓とされる。

「垂仁記」、「(田道間守の持ち帰った) 非時の香菓。今、橘というは是なり」

☆田道間守が大海原を渡つて遣いした海の彼方の常世とは、一体どこにあったのか。この謎を解く鍵は、「遙か彼方にある弱水」、「非時の香菓。今、橘というは是なり」の文句にある。

☆弱水とは、西域(インド・パキスタン・アフガニスタン・ペルシヤ)を指すらしい。仏教国として栄えたクシヤン朝や、パルテア国(ペルシヤ)・タミルは、これに該当する。

ここに、疑問がある。饒速日は何の目的があつて西域の常世まで使いを遣つたのか。なぜ、この非時の香菓を欲しがつたのか。この答えについてこう推理したが、どうだろうか。

「中国における不老不死の果実が西王母の手にする仙桃だったの対して、西域では非時の香菓、つまりミカンの実だった。

このことから、饒速日は封禅を果たして天神に昇るや、秦始皇帝や漢武王のごとく不死身願望に取りつかれた末、田道間守を常世に遣つて不老不死の仙菓や果実を持ち帰るように命じた」

こう考えることで、饒速日がその名に天照国照と冠されることや、仙化した帝と呼ばれること、さらに彼の墓が宝来山(蓬莱山)古墳と呼ばれることが、すんなりと納得できるはずだ。